

特255

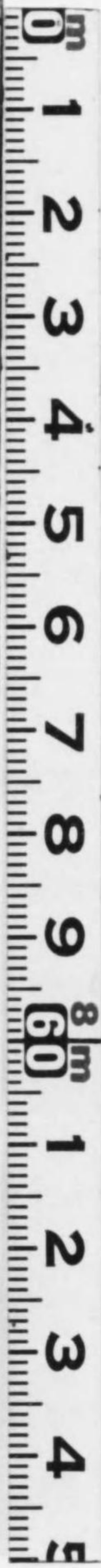
133

十二年七月

農業經營改善上より觀たる自給肥料

帝國農會

始



特 255
133



目次



我國に於ける肥料消費の概況 一

自給肥料の重要性 五

自給肥料改良増産獎勵優良農會の成績概要 九

四事例 二四

自給肥料獎勵の頃 五六





農業經營改善上より觀たる自給肥料

一、我國に於ける肥料消費の概況

(一) 金肥の消費狀況

我國に於ける肥料の消費額は農業技術の發展と共に益々増加し、殊に金肥に於て眼に見えて急激に増加し始めたのは歐洲大戰時の好況時代を境としてであつた。當時の金肥消費額は實に三億六千五百萬圓にも上り、之を明治三十六年から四十年に至る五ヶ年間の平均消費額三千九百四十萬圓に比較すると正に九倍にも達するのである。

其の後大戰景氣の反動が我國の經濟界にも逐次現れかけて來たが、それでも尙金肥の消費額は年々三億圓前後を示して居たのである。

ところが周知の通り昭和五年の農業恐慌の襲來によつて俄かに金肥の消費額は激減した。

即ち昭和四年には三億一千六百萬圓の金肥消費高を示してゐたものが五年には二億四千四百萬圓となり、六年には更に減少して二億圓も臺割れして一億八千五百萬圓となつてしまつた。だがそれ

を底値として其後は漸次増加の傾向を示し、昭和十年には再び二億七千七百萬圓程度にのぼつて來たのである。

(二) 自給肥料の消費狀況

以上は金肥についての消費狀況であるが、次に自給肥料について見やう。自給肥料は古來我國の唯一の肥料であつた事は云ふ迄もない。而して大正十三年の自給肥料の總消費額は三億四千六百萬圓と云ふ額に達して居たが、昭和六年には一躍二億五千萬圓と急減した。之は勿論昭和五年來の農業恐慌に伴ふ單位成分價格の低落によるものであるが、量的に見れば寧ろ増加を示して居る。其の後總金額は三億圓近くを示して來たが、殊に昭和十年には一躍三億二千九百萬圓にはね上つた。尙この間量的に見れば昭和七年來の農村經濟更生運動の擡頭と共に、政府も特に自給肥料改良増産に力を入れ、之が普及宣傳に乗り出した爲に、グン／＼と増加を示して來て居る。

今之を經濟更生運動の始る昭和六年の重要自給肥料の生産數量と、昭和十年のそれとを比較して見るに、昭和六年には堆肥二千五百萬瓩であつたものが、十年には三千四百萬瓩となり、又綠肥について見れば、六年には六百萬瓩であつたものが、十年には七百萬瓩となつたのである。之を見て

も確かに自給肥料増産に對する官民相呼應しての熱と力が窺はれるであらう。

(三) 反當施肥量について

次に、昭和十年度に於ける農區別の金肥と、自給肥料との反當消費額を示さう。

昭和十年金肥と自給肥料反當消費高

東 北 區	金 肥		自給肥料	
	圓	瓩	圓	瓩
東 北 區	二・八四	六・〇一	四・九〇	五・八三
關 東 區	六・〇一	四・五七	三・七一	六・八一
北 陸 區	七・〇四	六・六八	七・三四	六・八〇
東 海 區	六・六八	四・〇八	八・六七	七・〇七
近 畿 區	七・三一	四・四一	七・〇七	六・三九
中 國 區	四・四一	五・三七		
四 國 區	五・三七			
九 州 區				
平 均				

即ち全國平均反當金肥施用額は五圓三十七錢、自給肥料は六圓三十九錢で、結局自給肥料の方を一圓〇二錢だけ多く施用して居るわけである。自給肥料を金肥より少く施用して居る地方は關東、北陸、東海の三地方で、他は全部自給肥料の方を多く施用して居るのである。

因に右表中の主要肥料の内容について見ると、金肥については硫安が七千三百三十五萬九千圓、大豆粕五千百萬圓、調合肥料五千萬圓、次が過磷酸石灰の三千五百萬圓の順となつて居り、又自給肥料については、堆肥が約一億六千六百萬圓、綠肥約二千八百萬圓、人糞尿五千七百萬圓其他約七千七百萬圓となつて居る。

要するに我國に於ける反當肥料の消費額は前記の如くであるが、將來は技術的に、經濟的に所謂施肥の合理化を圖ることに一層力を致すべきである。

二、自給肥料の重要性

(一) 地力の維持増進上より觀たる自給肥料の重要性

自給肥料が地力の維持増進上より重要な肥料である事は學理的にも亦農家の體驗上からも明かとされて居るところである。

化學肥料のみを連年使用するときは、土壤の性状悪化し作物の生育は悪くなり、又病虫害の發生も多くなると云つた具合で、従つて收量品質共に低下することになる。だが自給肥料中堆厩肥、綠肥の如き有機質に富むものは、地力を維持増進する効果があり、土壤の酸性を防止し地力の恢復を計るに大變効果があるのである。

特に堆厩肥は土壤に保水力を増し、又粘質土壤に對しては粘りをやはらげ、砂土や火山灰土の様な土壤に對しては粘りを強よめる性質があるのである。即ち自給肥料は土壤の理化學的性質を改善するに大きな力を持つて居るものである。又綠肥作物は前記の効果以外に之は荳科植物である爲に栽培法が容易で手数を要する事が少なく、其の根に寄生する根瘤菌の働きに依り空氣中の遊離窒素を固定するから、綠肥を栽培することによつて最も安價に窒素を供給すると云ふ結果になるのである。

る。緑肥作物が自給肥料として重視される所以のものも如上二つの大きな理由に基くもので、殊に近年之が栽培熱も一般に高まり、桑園の間作として或は水田の裏作として漸次之が栽培面積も増加を示して来たのである。

最近三ヶ年間平均栽培面積を見ると四十九萬七千七百町歩で、其の中田の裏作栽培面積四十三萬五千三百町歩畑の栽培面積六萬二千四百町歩、之等田畑からの收穫高十四億九千五百二十九萬八千餘貫となつて居る。

尙綠肥作物として多く栽培せられて居るものにつき、昭和十年の事實について見れば、紫雲英の二十八萬八千七百四十七町、次が青刈大豆の十四萬八千四百四十七町、蠶豆豌豆の二萬四千町歩と云ふ順となつて居る。

(二) 農業所得の増大を計る上より觀たる自給肥料の重要性

帝國農會の昭和九年度農業經營調査によれば、農業經營費の現金支出中肥料費の割合は、大經營に於ては二一・三%中經營二六・六%小經營二一・五%で、其の占むる割合は必ずしも同様ではない。だが大經營に於ては租税諸負擔及雇傭勞賃に次いで多額の割合を占め、中經營では肥料費が最大の割合を占め、小經營では飼料費が最大で肥料費は之に次で居ることを知る、然し之を要するに我

國の如き農家經濟事情の下に於て、農業經營費の現金支出中、二一三割にも達する肥料代を支拂ふことは重大問題でなければならぬ筈だ。

今又、右經營規模別に全肥料費中に於ける自給肥料と金肥との割合を見ると次の通りである。

	金肥	自給肥料
大經營	四九・二%	五〇・八%
中經營	五二・一%	四七・九%
小經營	四七・一%	五二・九%

即ち大經營に於ては、金肥と自給肥料とは略々半々であるが、中經營に於ては金肥が多く小經營に於ては自給肥料が逆になつて居る。

更に我國農産物の大宗である米作に要する肥料費について見るに、帝國農會調査の昭和十一年度自作農米生産費に現れた。ところに依れば反當全國平均肥料費は十一圓三十錢で、其の内金肥は六圓六十四錢、自給肥料四圓六十六錢となつて居り、其の割合は自給肥料四一・二%に對し金肥五八・八%となつて居る。

斯く見て來ると、施肥の合理化により金肥を出来るだけ節約することが農業經營の改善上尙又農家經濟の改善上に至大の關係を有することが明瞭となつて來るであらう。それが爲めには先づ經營

費の貨幣支出部分を自給物に置き替ゆる事が重要となつて来る。肥料に付いて見れば、自給肥料を主體として其の成分の不足分を金肥で補ふやうに努める農家こそ眞に合理的生産を営む農家と云ひ得るであらう。

三 自給肥料改良増産獎勵優良農會の成績概要

自給肥料の増産と云ふも、素より農業組織の相異、或は地方環境の相異等に從ひ一言には云ひ得ないが、要するに各農家は前述の如く施肥法の合理化即ち自給肥料を増施して、出来るだけ金肥の節約を計ることが肝要である。斯くすることによつて、地力は維持増進され農業經營並に農家經濟は改善せらるものである。

昭和九年以來帝國農會が、自給肥料改良増産施用獎勵優良市町村農會の事績を調査し之を表彰して來た所以のものも、究極は如上の諸點の改善を一層普及徹底せしめんが爲めのものであることは云ふ迄もない。今昭和九年より十一年迄に至る三ヶ年間に於て表彰を受けた農會中北海道、沖繩及郡農會を除いた他の市町村農會、即ち昭和九年七十五ヶ市町村、昭和十年七十九ヶ市町村、昭和十一年百十三ヶ市町村の實績について述ぶることにしよう。

先づ反當自給肥料施用高と金肥施用高とを比較して見ると次の如くである。

反當自給肥料施用高と金肥施用高との比較

年度表彰	施用高		施用高割合	
	獎勵前	獎勵後	獎勵前	獎勵後
昭和九年度表彰	自給肥料 四・九〇 金肥 六・三三	自給肥料 四・四〇 金肥 四・四四	自給肥料 88.5% 金肥 61.5%	自給肥料 87.9% 金肥 82.1%
昭和十年度表彰	自給肥料 四・五九 金肥 六・三三	自給肥料 七・七九 金肥 四・五五	自給肥料 83.3% 金肥 57.7%	自給肥料 83.1% 金肥 77.9%
昭和十一年度表彰	自給肥料 四・七一 金肥 四・七一	自給肥料 七・六八 金肥 四・四七	自給肥料 50.0% 金肥 50.0%	自給肥料 43.2% 金肥 35.8%

右の表に依つて明らかなる如く、自給肥料と金肥との施用割合は年に依り相異はあるが、獎勵前は、金肥の施用高と自給肥料の施用高とは同額或は金肥の施用高の方が多額を占めて居つたところが多かつたのである。然るに獎勵後に於ては三ヶ年共全く反對に自給肥料の施用高の方が多くなつた。獎勵前と獎勵後の自給肥料の施用高を比較して見ると、昭和九年度表彰農會については二圓二二銭、十年度表彰農會については三圓二十銭、十一年度表彰農會については二圓九十七銭と各々増加し、一方購入肥料の方を見ると昭和九年表彰農會では一圓七十八銭、昭和十年度表彰農會一圓五十銭、十一年度表彰農會二十四銭と獎勵前に比し獎勵後が減少を示して居る。これは全く市町村農會の自給肥料獎勵の結果であると同時に、この事は又他の多くの市町村に於ける自給肥料増産の餘地を暗示するものではなからうか。

次に表彰年次別に農區別に分ちて自給肥料と金肥との施用高の割合を見よう。

農區別自給肥料と金肥施用高比較

昭和九年度表彰農會

農區別	施用高		施用高割合(%)	
	獎勵前	獎勵後	獎勵前	獎勵後
東北區	自給肥料 三・七六 金肥 六・九六	自給肥料 六・五七 金肥 三・六三	自給肥料 48.9% 金肥 30.9%	自給肥料 64.9% 金肥 33.6%
關東區	自給肥料 四・三三 金肥 七・三九	自給肥料 六・四六 金肥 五・一〇	自給肥料 36.9% 金肥 43.1%	自給肥料 55.9% 金肥 44.1%
北陸區	自給肥料 二・八八 金肥 七・五〇	自給肥料 四・七二 金肥 五・〇〇	自給肥料 27.8% 金肥 31.2%	自給肥料 48.6% 金肥 51.4%
東海區	自給肥料 三・三三 金肥 六・七三	自給肥料 五・四四 金肥 五・〇九	自給肥料 33.2% 金肥 46.8%	自給肥料 52.7% 金肥 48.3%
近畿區	自給肥料 四・五四 金肥 五・五六	自給肥料 六・六一 金肥 五・二八	自給肥料 45.0% 金肥 55.0%	自給肥料 55.6% 金肥 44.4%
中國區	自給肥料 三・八七 金肥 三・三三	自給肥料 五・二四 金肥 二・二六	自給肥料 53.6% 金肥 22.6%	自給肥料 69.9% 金肥 30.1%
四國區	自給肥料 四・〇九 金肥 六・七三	自給肥料 五・八六 金肥 五・一七	自給肥料 37.8% 金肥 42.2%	自給肥料 53.1% 金肥 46.9%
九州區	自給肥料 四・三六 金肥 五・五〇	自給肥料 七・九五 金肥 三・九六	自給肥料 42.2% 金肥 55.8%	自給肥料 66.6% 金肥 33.4%

昭和十一年度表彰農會

東 北 區	施 用 量		施 用 高 割 合 (%)	
	獎勵前	獎勵後	獎勵前	獎勵後
關 東 區	自給肥料 483	金肥 488	自給肥料 497	金肥 503
北 陸 區	自給肥料 288	金肥 685	自給肥料 293	金肥 696
東 海 區	自給肥料 396	金肥 877	自給肥料 398	金肥 882
近 畿 區	自給肥料 476	金肥 622	自給肥料 482	金肥 622
中 國 區	自給肥料 486	金肥 502	自給肥料 492	金肥 508
四 國 區	自給肥料 477	金肥 692	自給肥料 483	金肥 697
九 州 區	自給肥料 522	金肥 522	自給肥料 500	金肥 500

關 東 區	施 用 量		施 用 高 割 合 (%)	
	獎勵前	獎勵後	獎勵前	獎勵後
關 東 區	自給肥料 572	金肥 699	自給肥料 580	金肥 700
北 陸 區	自給肥料 252	金肥 496	自給肥料 259	金肥 497
東 海 區	自給肥料 465	金肥 472	自給肥料 477	金肥 483
近 畿 區	自給肥料 499	金肥 555	自給肥料 509	金肥 563
中 國 區	自給肥料 544	金肥 288	自給肥料 552	金肥 286
四 國 區	自給肥料 438	金肥 636	自給肥料 442	金肥 642
九 州 區	自給肥料 607	金肥 282	自給肥料 612	金肥 285

以上年度別農區別に見ても、昭和十一年表彰の東海區、九州區を除いては各年度の農區とも皆金肥が減少し、自給肥料の増加して居る事がわかるであらう。今各表彰年度にしたがひ、獎勵前と後に於ける自給肥料と金肥との施用状況を見るに、昭和九年度表彰の分については獎勵前は、中國區を除く他の農區は何れも自給肥料より金肥が多かつたが、獎勵後に於ては、北陸を除く他の農區は何れも自給肥料の方が多くなつたのである。昭和十年度表彰の分については獎勵前自給肥料の施用高は何れの農區について見ても、金肥より少なくなつたものが、獎勵後に於ては、北陸を除く他の農區は何れも自給肥料の方が斷然多くなつて居る。

又昭和十一年度表彰分について見るに獎勵前に於て、自給肥料施用高が金肥より多かつたのは中國、九州の二區だけで他は何れも少なくなつたが、獎勵後は、之又何れの農區共金肥より自給肥料が

斷然多くなつて居るのである。
 之等の結果から見れば、各農區共獎勵の効果が端的に現れたものと見てさしつかへないであらう。
 さて次に表彰された市町村農會管下の農家は獎勵前は、どう云ふ方法で肥料を購入して居たか又
 それが獎勵後はどう云ふ風に變つたかを見ると次の如くである。

肥料個人購入、共同購入別割合

昭和九年度表彰農會 (昭和八年)	獎勵前 獎勵後	個人購入 %	共同購入	
			産組 %	其他團體 %
昭和九年度表彰農會 (昭和八年)	獎勵前 獎勵後	五九・三 二七・〇	二五・八 四九・八	一四・九 二二・二
昭和十年度表彰農會 (昭和九年)	獎勵前 獎勵後	五一・四 二二・七	二九・七 五九・八	一八・九 一七・五
昭和十一年度表彰農會 (昭和十年)	獎勵前 獎勵後	四七・五 二五・九	三七・〇 六〇・七	一五・五 一三・四

即ち三ヶ年を通じて見ると何れも個人購入の割合が減少し、共同購入の割合が増加して居ることを知り得るであらう。

之は種々の原因に依る事であるが、要は農家が共同の力により良質で安價な肥料を求めんとする自覺の現はれと見てさしつかへないであらう。
 次に昭和十年度及十一年度に於て表彰を受けたものにつき農區別に堆厩肥緑肥の反當施用量を見よう。先づ堆厩肥について見ると次の通りである。

農區別堆厩肥反當施用高比較

昭和十年度表彰農會	獎勵前	獎勵後 (昭和九年)	増減比較					
				東 北 區	關 東 區	北 陸 區	東 海 區	近 畿 區
昭和十年度表彰農會	獎勵前	獎勵後 (昭和九年)	増減比較					
東 北 區	一三〇貫	二九三貫	(増) 一六三貫					
關 東 區	一八一	三三五	(増) 一五四					
北 陸 區	四一	九六	(増) 五五					
東 海 區	一〇五	一九七	(増) 九二					
近 畿 區	一二八	一八六	(増) 五八					
中 國 區	一二九	二一三	(増) 八四					
四 國 區	一〇九	二二五	(増) 一一六					
九 州 區	一四七	二三七	(増) 九〇					
平 均	一二一	二二三	(増) 一〇二					

昭和十一年度表彰農會

表彰区域	奨励前		奨励後		増減比較
	数量	単位	数量	単位	
東北區	一七八貫		二六一貫	(昭和十年)	(増) 八三貫
關東區	一六八		二五〇		(増) 八二
北陸區	三九		一一四		(増) 七五
東海區	一二七		二〇五		(増) 七八
近畿區	一二一		二一三		(増) 九二
中國區	二二六		三五二		(増) 一二六
四國區	八八		一七二		(増) 八四
九州區	一八三		三一七		(増) 一三四
平均	一四七		二四三		(増) 九六

即ち全農區の堆厩肥平均を見ると、昭和十年度に表彰されたもの、奨励前の平均反當施用量は百二十一貫であつたものが、つまり奨励後の十年度には二百二十三貫となり、百〇二貫の増施を見、昭和十一年度表彰のものは奨励前の百四十七貫より二百四十三貫となり、九十六貫の増加を示して居る。其中昭和十年表彰のものでは、東北區、關東區、昭和十一年表彰のものでは、九州區、中

國區が特に著るしく増加を示して居るのを見る。
次に綠肥の反當施用高を見ると左の通りである。

農區別綠肥反當施用高比較

表彰区域	奨励前		奨励後		増減比較
	数量	単位	数量	単位	
東北區	一一貫		三二貫	(昭和九年)	(増) 二一貫
關東區	八		六四		(増) 五六
北陸區	六七		九六		(増) 二九
東海道	二六		八六		(増) 六〇
近畿區	三五		五六		(増) 二一
中國區	六〇		九三		(増) 三三
四國區	三八		一〇六		(増) 六八
九州區	五四		一二四		(増) 七〇
平均	三七		八二		(増) 四五

昭和十一年度表彰

東 北 區	關 東 區	北 陸 區	東 海 區	近 畿 區	中 國 區	四 國 區	九 州 區	平 均	獎勵前	獎勵後	増減比較
									(昭和十年)	(昭和十年)	(増)
一九貫	二四	七四	三八	二七	二九	二二	四四	三五	三〇貫	四九	(増) 一一貫
二四	四九	九〇	五八	九五	五七	七六	九三	六九	四九	二五	(増) 二五
七四	九〇	(増) 一六	(増) 二〇	(増) 六八	(増) 二八	(増) 五四	(増) 四九	(増) 三四	六九	三四	(増) 三四

即ち緑肥の全農區の平均を見ると昭和十年表彰のものでは三十七貫より八十二貫となり四十五貫の増施となり、昭和十一年表彰のものでは三十五貫より六十九貫となり三十四貫の増施となつて居る。其の中特に昭和十年表彰のものでは、九州區、四國區に於て、十一年表彰のものでは近畿區、四國區に於て顯著に増加を示して居る。之等の自給肥料が増産さるゝ爲には農家自體の自覺と努力によるは勿論であるが、又市町村農會

に於ける種々なる獎勵施設に負ふ所の大きなものあることは見逃してはならぬ。然らば之等の市町村農會が自給肥料増産獎勵施設としては如何なる種類の施設を行ひ來たかを次に見よう。

昭和九年度表彰農會(數字は施行市町村農會數を示す)

堆肥品評會	五五	緑肥種子購入斡旋及共同購入補助	三七
自給肥料に関する講習講話會	二九	採種圃經營	二八
堆肥舎設置獎勵	二六	緑肥品評會	一九
家畜家禽の獎勵	一一	堆肥積込週間	一一
施肥法及栽培法試験地	一一	草刈デー	五
其の外、印刷物の配布、指導員の設置、家畜品評會、採草地の整理、灰取共進會、灰小屋設置獎勵、堆肥舎建設融通講、紫雲英目測競枝會、堆肥框獎勵、稻藁賣防止週間等。			
昭和十年度表彰農會			
堆肥品評會	五四	緑肥種子斡旋及共同購入補助	三八
講習講話會	三七	採種圃經營	三二
堆肥舎設置獎勵	三一	家畜家禽獎勵	二六

- 緑肥品評會 二六
- 堆肥一齊積込デ 一八
- 施肥實地指導地 一四
- 草刈デ 一二

其の外、自給肥料施設優良村の視察、試験地の設置、印刷物の配布、研究会座談會協議會の開催、採草地の設置、堆肥盤の奨励、指導員の設置、灰取共進會、灰置場設置等。

昭和十一年表彰農會

- 堆肥品評會 一〇三
- 採種圃經營 七五
- 緑肥種子幹旋及共同購入補助 七三
- 講習講話會 四三
- 堆肥舎建設奨励 三三
- 有畜農業の奨励 二四
- 緑肥品評會 二二
- 堆肥積込週間 二二
- 草刈デ 一六
- 奨励員施設 一六

其の外、堆肥盤の奨励、尿溜の設置奨励、先進地の視察、堆肥鉢購入補助、採草地の整理、ホーク購入補助、自給肥料デ、灰置場設置、研究會、座談會等。

右に依つても明らかなる如く市町村農會は自給肥料の改良増産奨励の爲に種々なる施設方法を講じつゝあることをうかゞひ知ることが出来るであらう。

即ち堆厩肥の改良増産のためには堆厩肥品評會の開催や、堆厩肥舎の設置、堆厩肥積込週間、家

畜家禽の奨励、草刈デ、講習講話會の開催、奨励員の設置の如きをなし、又緑肥作物の普及増産奨励の爲にな、品評會の開催や種子の共同購入幹旋、種子代の補助等をなし、緑肥の奨励上最も重要な種子の供給については農會が直營の採種圃を設けたり、或は部落組合に採種圃を經營せしめたりして供給の圓滑を計つて居るのである。

然らば以上の如く自給肥料を増施し、施肥の合理化を計つた結果が農産物の生産に如何なる影響を及ぼしたか、之を主要農産物たる水稻の收量に付き農區別に見ると次の如くである。

農區別水稻反當收量比較

昭和十年度表彰農會

東 北 區	關 東 區	北 陸 區	東 海 區	近 畿 區	中 國 區
奨励前 石 二・〇二	二・〇四	一・九六	二・二七	二・二三	二・一一
奨励後 石 一・八七	二・二三	一・九三	二・四七	二・二七	二・三二
増減比較 石 (減)〇・一五	(増)〇・一九	(減)〇・〇三	(増)〇・二〇	(増)〇・〇四	(増)〇・二一

四國區	一・九四	一・九〇	(減)〇・〇四
九州區	一・九一	一・九一	〇
平均	二・〇六	二・一一	(増)〇・〇五

昭和十一年度表彰農會

平均	獎勵前後		増減比較
	(昭和六年)	(昭和十年)	
東北區	二・一三	二・〇七	(減)〇・〇六
關東區	一・九八	一・九六	(減)〇・〇二
北陸區	二・一八	二・三四	(増)〇・一六
東海區	二・〇三	二・一四	(増)〇・一一
近畿區	二・一四	二・四一	(増)〇・二七
中國區	一・七三	一・九〇	(増)〇・一七
四國區	一・九二	二・二九	(増)〇・三七
九州區	一・八八	一・九四	(増)〇・〇六
平均	二・〇〇	二・一三	(増)〇・一三

即ち昭和十年度表彰市町村農會の獎勵前の全農區平均反當玄米收量は二石〇六升であつたが、昭和九年は二石一斗一升となり、獎勵前に比し僅かに五升の増加しか示さなかつたが、然し昭和九年

は春以來、東北、北陸、山陰各地の雪害を始めとし北陸地方の大風水害、九州四國の天旱害、關西を中心とする大風水害、更に東北地方の大冷害等全國的に各種の災害相踵いで起つた事を想起すれば、此の五升の増収は決して僅かとは云へないであらう。又昭和十一年度表彰のものについて見ると、昭和六年の全農區反當平均玄米收量は三石であつたものが、昭和十年は冷害早魃或は風水害等前年に引續き各種災害に見舞はれたにも拘らず町村平均に於て二石一斗三升の收量を擧げ得、昭和六年に比べて一斗三升の増収を示して居るのである。

結 び

以上表彰を受けた市町村農會の實績から推して考へるに、農家や指導者が自給肥料の必要を感じ眞劍に之が増産に努むるとするならば、まだ一般の市町村に於ても増産餘地相當大なるものがあると考へられる。そして又自給肥料改良増産に努め、之を主とした合理的施肥を行ふ事によつて如上のごとく農業經營並に農家經濟に及ぼす効果の實に偉大である事をも痛感するのである。

四、事 例

(一) 滋賀縣の土地愛護週間

昭和の御大典と悠紀地方勅定の光榮を記念するため毎年八月二十五日から三十一日迄滋賀縣廳、縣農會、郡農會主催の下に滋賀縣下九萬農家を總動員して行ひつゝある耕地愛護週間は、年一年と彌増しに輝かしい業績を遺し、今や全國的の模範事業と賞め稱へらるゝに至つて居る。

我等は土の子、「土に還り飽くまで土の日本を護らねばならない、世をあげて深刻なる經濟不況に憫む時、我等の農村農家は破局のどん底へ突落されたとする瀬戸際に踏みとどまり、健氣にも一日々々を克く戦ひ、克く堪へて來た、これから先も、より以上の苦難が伴ふことであらう。

而も此難境を他力で救はれようなどと考へることは、我國の現状から見ても全く絶望である、宜しく自力更生の意氣に燃へて我等の全力を「土」に捧げて土に感謝する事は吾等農民の最大至上の義務である。即ち耕地を愛護することではないか、土への奉仕の感激に燃ゆるところ爰光百度の灼熱も瀧なす汗も物の數かは、光榮の歴史に燦と輝く悠紀地方農民たるの本領を發揮し、サア一家一村一郡一縣老も若きも、男も女も擧つて競つて耕地愛護の第一線へ躍り出でようではないか。

之が耕地愛護週間の趣旨で、愛護週間中是非實行する事項として次の項目を掲げて居る。

畦や堀や野や山の雜草は悉く刈り取りませう。

螟虫の被害莖は一本も残らず切り取りませう。

溝や川を掃除して泥や藻は綺麗に浚へませう。

田畑の庇蔭木は見つけ次第伐り拂ひませう。

草や泥藻で必ず堆肥を作りませう。

さうしてこの耕地愛護の精神は單に週間中のみで發露ではなく、年中不斷に持ちつゞけ年中不斷に發揮しよう。耕地愛護運動の擴充強化こそ今日の農村農民吾々にとつて最も大切、最も意義深き仕事ではないか、これがためには、われ／＼は、

我等の小さな經濟を守る爲に……少くとも金肥を半減しましょう。

尊き田畑の功德に報ゆる爲に……より多く地力を増進しましょう。

時節柄更に週間を超越して左の二項を勵行させよう。

第一、田畑の空地は總て綠肥を作りませう。

紫雲英は一反當種子一、二升で種子の砂搗き、土地の排水、草木灰、過磷酸石灰の施用など手入れを良くするときは千貫位の手間肥が容易に得られ、之は飼糞三十貫、大豆粕四十五貫、菜種粕六

十五貫位に匹敵する肥效がある、今年の彼岸には裏作のない田や、桑園に青刈大豆、ゲンゲ、蠶豆、ザイトウキケンを播いて全縣を緑化しようではないか。

第二、農閑期に「ウン」と堆肥を造りませう。

土地を肥やすには堆肥が最も良い、堆肥は雜草、藁、塵芥、藻、落葉などを集めて充分に水に浸し、田畑の一隅に徑六尺、高さ五尺位の圓積となし、厩肥糞渣鶏糞などを混合せ、周圍と上方を藁、古藁等で被覆すれば夏期は二ヶ月、冬期は三、四ヶ月で腐熟するのである。

若し急いで腐熟堆肥を得たい時は一積に下肥八荷位か、硫酸二貫又は石灰窒素二貫に米糠六升を加へ積み混みの時混合するとよい。

以上が毎年八月二十五日から三十一日迄の一週間江國近江九萬農家及知事經濟部長、縣農會正副會長を首じめ幾百の督勵員と全く官民一致の總努力で行ふ耕地愛護週間の豪華版の全篇である。

(二) 山口縣主催堆肥原料柴草刈取競技會

皇國農村中堅青年の勤勞精神を振起して心身の鍛練に資し、併せて自給肥料増産の認識強調を圖らんとするのが此の堆肥原料柴草刈取競技會の目的で、此の競技會は昭和九年八月一日に山口縣

主催のもとに縣下の高原秋吉臺に於て、個人競技、郡市對抗競技、特殊團體競技の三方法を以て行はれ、此の參加人員五百名で競技會の事務員、審査員として任命又は囑託された者は、縣農務課は勿論、經濟更生課、林務課、社會教育課、衛生課、農事試驗場、系統農會職員、青年團幹部等廣範圍に亘り總數百名に及ぶと云ふ大規模であつた。

競技選手及應援團は前日より秋吉臺の陸軍廠舎に合宿し、八月一日の午前二時起床ラツパの音も高く一齊に起床して、朝食休息の時間はない、間もなく響く集合ラツパに前日配布された記念手拭で後鉢巻に輕裝し廠舎前で整列の上點呼があり、次の如き「採草」憂國愛農の歌を一同で合唱し三時大田町青年團の樂隊を先頭に競技場に向つた。

「採草」憂國愛農の歌

- 一、此處は本州西端の、防長二州の農村が、更生自力に奮ひ立つ。
- 二、今や非常時局の、安危を擔ふ吾々は、使命は重し腕ぞ鳴る。
- 三、田園守る吾々は、滿身憂國愛農の、血潮漲り肉躍る。
- 四、一難去りて襲ひ來る、時代の潮乗り越えて、雄々しく進め更に又。
- 五、維新明治の先輩を、偲びて起てる吾々は、先驅を指指邁往す。
- 六、鍬と鎌とで吾々の、力の限り魂限り、勵み努めよ野に山に。

七、採草利用も更生の、首途に腕の試し刈り、國土保育のそが爲に。

八、流汗淋漓瀧つ瀬の、試練は憂國愛農の、心と燃えて鐵熔かす。

午前四時煙火を合圖に莊嚴な入場式を擧げて、四時四十分より競技に入り先づ個人競技より開始した。

個人競技選手百五十名を五回に分け一回三十名づゝで競技時間は十五分間、競技開始の號砲を合圖に一齊に選手は飛び磨ぎすました銀刃が物すごく閃く。

競技時間中に約五貫匁一束を荷造りして再び刈込むので號砲を合圖に競技は中止され、荷造、刈

跡、重量の三點を審査するので、刈取量の最多量者は三十貫六百匁、最少量五貫百匁であつた。

郡市對抗團體競技 之の競技方法は個人競技と變りはないが、各郡市より選抜した五名宛の選手(郡市合計七十五名)が協力して行ふ郡市の對抗競技で最多量刈取つたのが六十九貫百匁、最少量が二十八貫百匁であつた。

特殊團體競技 本競技は秋吉臺關係六ヶ町村の男女青年團の對抗競技で選手は一ヶ町村男子十五名、女子十名、役馬一頭に枋十本を配した出立で、競技地の中央から決勝點迄約三町あり、青年團は白シャツ、ゲートルで地下足袋、枋を背にし女子選手は、作業服に鉢巻赤褌で續き馬一頭が配され、競技開始の號砲を合圖に各選手は一齊に刈り込み、荷造りし草束を擔いで山をかけ下り、はせ

上り、或は馬の背に乗せ自分も、どつさり擔いで次から次へと決勝點へ運搬を競ふので刈取り運搬の最多は二百五十一貫六百匁、最少百七十七貫七百匁の成績を収めた。この競技時間は四十分間で號砲を合圖に競技が終了し、午後〇時半より褒賞授與式を舉行、此の企ては官民一致協力の結果盛會裡に終了したのである。

(三) 恐怖に學ぶ堆肥舎建設無盡

山梨縣 北巨摩郡 武川村

甲斐駒から送られるそよ風に嵐鳳山麓一帶の樹々が秋の装ひを始める頃、好況時代の夢から未だ覺めず酒に狂ひ流行にすがつてゐた武里、新富の兩村は、釜無川の支流大武川、小武川の荒れ狂ふに任せ澄みきつた空の下にやがては丸裸にされそうな樹々の姿をのまゝに、遂には村唯一の指導獎勵機關たる農會さへも解散せられ、果ては産業組合の維持、村税の滯納整理さへ覺束なくなつてしまつた。

偶々昭和八年、血の出る様に疲れ切つた兩村の合併を契機として名も武川村と改め同時に經濟更生の指定村となるや、村長薦木氏を中心に村農會の復活、技術員の設置、四種兼營の産業組合、在郷軍人分會、青年團等の更生其の他十有餘團體の改組乃至は設立を行ひ、村教育機關と共に悲壯な

意気込みで、各個人毎の現況調査をやり、これを基礎として経済更生計畫をたて、一路計畫の實行へと邁進したのであつた。

× × ×
 總戸數四百九十八戸中農家戸數四百十六戸、一戸當田畑七反九畝、山林原野一町五反、食糧に於ては既に自給以上の生産を見てゐたが、購入肥料に於ては一戸當五十圓、合計二萬圓を突破してゐた現況が調査の結果始めて瞭かとなつた時、廣漠たる高原地帯を抱いて殆んど無限に近い青草、落葉等の天恵を顧みなかつた村民は、この天恵の利用と綠肥作物の栽培とによつて自給肥料の増産を圖り、これによつて二萬圓に上る金肥の節約を叫び始めた。

× × ×
 計畫樹立三年購入肥料は綠肥や青草の増産に伴つて石灰の購入増加を見たゞけで其の他はすべてに於て著しく減少し總額一萬四千圓一戸當二十八圓と言ふ歴然とした改善の跡が窺知されるに至つた。

自給肥料の増産には堆肥舎の建設が伴はねばならなかつたが、その方法として茲に堆肥舎建設無盡が生れた。一人一口一圓、毎月開催し初回には掛金の外に十錢宛を前納して産業組合に預入れ、全回無缺席者にはこの前納金額に預金利子を附して返し、缺席一回毎に十錢宛を過怠金として差引
 × × ×
 くと共に利子も附與せず、この金で無缺席者に対し堆肥製造用藥劑等を授與することゝしてゐた所幸か不幸か賞品授與の恩典に浴したものは一人さへもなかつた。尙加入者中には必ず農業技術員又は産業組合の事務員が加入することゝして農業座談會を兼ねて行ひ、競争入札に依つて落札者を定め、落札金はそのまま産業組合で領り建設資金以外には絶対に流用せしめない様に、着工の際始めて農會の承認を経て渡してゐる。

× × ×
 そして部落の状況其の他に依つて、講員が少數の場合は第一年次には基礎工事、第二年次には建築と言ふ様な方法を探つてゐる。數萬言の美辭よりもまのあたり基礎工事の出來たコンクリートの上を始め宅地の空處の所狭きまでに山と積まれた數限りない刈草を見た時「村の更生は自給肥料の増産から」の感を深からしめるに充分であつた。

一村を救ふ大偉人出でよと叫んで見た處でオイソレと出て來るものではない。不出世の一偉人よりも正しい判斷力と、確固不拔の實行力とを有する多數の村民の協力が如何に必要であるかを痛感した。

(四) 堆肥と石灰窒素による施肥改善

滋賀縣蒲生郡馬淵村

不合理施肥の標本

東海道線近江入幡驛から約半里、坦々たる琵琶湖畔の水田の眞只中に馬淵と云ふ村がある。

畑は一戸當僅か六畝足らず、山と雖も些か東端に丘の如き姿を見せるのみ。

排水不良な半濕田の水田が全土地の八割をしめ、滋賀盆地特有の姿を見せてゐる中に總戸數四百九十九戸(内三百八十五戸は農家)が、九ツの部落に分れて點在してゐる。

村の農業は古來より水稻單作に僅か養畜を加味する一町内外の單純經營であるが恐慌前に於ては高米價に酔ひ、偷安を貪り關西にあつて關西型農業に非ず精農にして精農に非ざる農業を營んでゐた。施肥に於ても御多分に洩れず。土地は酸性でありながら陋習は抜けず割高な酸性有機質購入肥料を偏用し恐慌後相當改良は進められたが昭和八年に於てさへ、購入肥料は三萬五千圓約五割を占め就中魚肥、大豆粕、骨粉、蛹の如きは二萬六千圓購入肥料の七割六分一戸當七〇圓に及ぶ程であつた。

かゝる世間知らずの不合理な施肥標本の村に恐慌の嵐は轟々と吹き廻り昭和六年には唯一の生産物米も二十圓以下となり來るべきものは只赤字の續出であつた云ふ状態打開のため農業經營の合理化及び自力更生が叫ばれ始めたが、何分畑のない山のない半濕田地帯だけにそれも容易でなく殊に肥料の自給化は難中の難であつた。遂ひに昭和八年には農業現金支出中自作農にありては四割小作農にありては五割が購入肥料に依つて占められ、農家經濟を益々窮地へ陥入れる時が來た。

鍵は堆肥と石灰窒素

偶々昭和八年經濟更生樹立町村に指定されるや村の更生歌は全村民に歌はれたが肥料に至つては牛歩も猶早かるべしと思はれる程遅々として進まなかつた。畦草刈取週間。草木灰貯藏庫設置、紫雲英の改良。堆肥に關する印刷物配布等々、あらゆる機關があらゆる機能を發揮し、一握の灰一本の雜草も無駄なき様に努めたが、山なき、畑なき、半濕田地帯丈に下手をすれば勞働強化以外に何物もない有様で其の進捗は容易でなかつたが必要は發明の母である。この苦吟の中に進むべき道は見出されたのである。

その一は堆肥と石灰窒素による施肥改善である。

昔日の高價を不合理なものを無理に擇んだとさへ思はれる魚肥大豆粕をすて最も安價な窒素肥料で酸性土壤改良に最適な石灰窒素を採り之に配するに堆肥木灰鶏糞をもつて代へやうとした。だが

之が施用は特に注意を要するので之を保守的な農民徹底せしめるには通り一遍では行かない。農會は施肥改善指導地（各部落毎）三反歩を設け、之によつて直接に農民を導き、産業組合は石灰窒素硫酸の斡旋に努め、青年學校又之に和して懸命の運動が續けられた。

その二は畜産の積極政策である。

堆肥の給源既肥のもと。すべて養畜にある。そこで先づ本村の更生計畫の第一段として各戸の能力に應じて家畜を積極的に入れさせ（大體耕地一町歩内外牛と鶏五反歩の内外豚と鶏）その爲めの資金は産業組合が低利で貸し付けること。第二段はかくして入れた養畜を有利化することである。だがこの第二段の目的を達するためには二つの方法がある。一つは家畜の飼養費を切下げること、他の一つは畜産物の商品價値の向上である。と云ふわけで之が具體的方法として二毛作三毛作の研究、改良により紫雲英、雲苔、麥類の増殖を計りその品質優良なるものは販賣し、殘滓並に中等品以下は飼料にあて、生産費を下げ、更に肥育組合の應援を得て牛の聲價を高め又豚の如き變動性の多いものは農産加工（ハム、ベーコン）まで進めて、商品價格の向上をはかり、養畜に對する安全性を確保することとしたのである。

凱歌は擧る

正しい指導方針に努力が伴へばそこに必ず凱歌が擧る。かくて僅か二年昭和十年、その昔不合理

施肥の標本が今や合理的施肥の標本に化しつゝある。

購入肥料は二萬三千圓に減少し僅か二年間に一萬一千圓（三三）%の減少を見た就中大豆粕、魚粕は各々五千圓方減少し、油粕蛹は全然姿を沒し増加したのは石灰窒素と硫酸のみ。

更に一方牛は百四十戸より百六十戸へ、豚は一戸より四十三戸鶏は三百四十戸より三百七十戸へ増加し従つて自給肥料に於ても堆肥五十二萬貫既肥七十六萬貫となり四十%の増加を示して改善努力の跡は今や歴然と現はれて來たのである。

だが理想の彼岸は猶遠いまだ一萬三千圓の魚粕がある、千六百圓の骨粉と大豆粕がある、しかし颯爽たる更生の鯉の音きには決河の勢が聞える、理想の肥料經濟の村は間もなく完成されるだらう。

（五）堆肥の改良増産に堆積盤を普及

埼玉縣大里郡御正村

高崎線熊谷驛を下車して荒川を涉り右折すれば、坦々として一直線に延びる道路を見る、行くこと一里餘にして經濟更生指定村、埼玉縣大里郡御正村がある、全村戸數六百九十三戸の中農家戸數六百三十四戸を數へ米、小麥、養蠶を主とする純農村である。更に牛馬の飼育、養豚、養鶏、養兎が熾に行はれてゐる。

本村は縣下に於ける肥料合理化の成績優良なる村としての寄居町、北泉村、藏澤村等と共に定評あるところであるが、嘗ては激烈な小作爭議地として全國屈指の難治村であつたが、最近の本村は村役場と村農會が中樞となつて他の諸團體を糾合し緊密に提携協力して村民の精神的、經濟的の指導獎勵に専念し、村經濟更生の計畫實現に邁進した結果、今日の輝ける平和郷、御正村の實現に成功したのである。

特に御正村は農業經營の基本たるべき施肥の合理化につき徹底的の指導獎勵を計畫し之を實行して來たのである。

從來本村民は肥料智識甚だ乏しく、舊き習慣を徒に續行するのみで、地力の衰退收穫量の減收、品質の低下等の損失計り知れざるものであつた、茲に於て村農會は協力して昭和六年を肥料年間として肥料智識の普及啓發を企圖し縣廳、農事試驗場等の技師を講師として屢々講演會を開催し併せて映畫による智識の開發、施肥試驗地の設定、堆肥舍及堆積盤の増築、施肥法の合理化、自給肥料の改良増産等の指導に精勵して今日に至つたのであるが、これにより農家の肥料智識は面目一新して、遂に今日の聲價を贏ち云ひ得るに至つた。

尤もこれらの成果は郡、村農會の熱意と村民の理解協力にあるは勿論であるが更に縣當局の指導獎勵に負ふところ絶大なるものがある。

斯くして獎勵せられた指導施設には多くの觀るべきものがあるが、特に自給肥料の主位を占むる堆肥の増産改良は顯著なものがあり、堆肥舍の如きは全農家の八割は之を有し又近年方々の縣でも獎勵しつつある堆積盤が本村でも所謂埼玉式堆積盤として相當普及して居るこれは昭和七年以來、堆肥の改良増産に積極的に乗出した縣當局が、堆積盤設置に對しては、特に獎勵助成金を坪當り一圓五十錢程度を交付して、全縣下に之が實施を獎勵して來たが、御正村の如きは全村に涉り相當數の普及を見るに至つてゐる、特に本村の上新田は縣の助成を得て全部落二十三戸ことごとく一戸宛六坪、計百三十八坪の之が施設を有してゐる。この堆積盤による堆肥の製造は極めて合理的な方法として農林省でも大いに推奨してゐる。

この堆積盤は、約六坪の場所にコンクリートを敷き同じくコンクリートをもつて高さ三寸位の圍ひをつくる、即ちコンクリートの箱を設ける、この一隅に孔を開けその下に壺を埋め、堆積盤より流れ出る汁を受ける、この汁はそのまゝ肥料として施用することも出来るし、また盤中の堆肥が乾燥した場合には、再びこれをかけて乾燥を防ぐのである、設置の場所は畜舎又は鶏舎に接したところを選び、樹葉、麥稈、刈草、野菜屑等を堆積し、それに畜糞、鶏糞、人糞尿等を混入して腐熟せしめた後、堆肥舍に移積するのである。之が普及の結果、堆肥の生産激増し、而も露地堆積による肥料成分の逃亡を完全に防ぎ堆肥の品質優良なるを得、之が施用による農家經濟に裨益する點は

實に甚大なるものがある。

更に注目すべきに、養蠶期には蠶舎の廢棄物、まふし殻等をも投げ入れるのであるが、堆積盤がコンクリートであるため、蛆の地下侵入を防ぎ養蠶の大敵たる蠶蛆病の防除に役立つこと莫大である、依つて最近堆肥生産のための堆積盤設置も必要ながら、養蠶家の蠶蛆病防除のため養蠶業團體に於て、之が設置に大童の奨励をなしつゝあるが、而し今日に於ては縣又は郡村農會等の奨励を待つまでも無く、農家はその必要を痛感して、全村之が實施を見つゝあるの状況を呈してゐる。

(六) 自給肥の増産五ヶ年計畫を三ヶ年で

高知縣 高岡郡 日下村

日下村は高知縣高岡郡の一閑村で、土讃線が村の中心を横斷し、又高知市からはバスの便もあるので高知としては便利な村である。

村の總戸數は八百七十六戸内六百六十二戸は農家である田は三百二十八町五反畑は三百五十二町七反であるから一戸當耕作田畑面積は七反二畝餘に過ぎない山林は九百十八町もあり、従つて村の大半は山林で覆はれてゐると云つてもよい農産物としては米が主で、麥、甘藷は之に次ぐ。また土佐紙の原料となる楮も相當出る。養蠶も盛んで養蠶戸數は三百戸以上ある。家畜は牛が百七十三頭

で最も多く、馬は九十一頭で之に次ぐ。山羊は少々飼はれてゐる。

養鶏は相當盛んである。

本村は昭和七年に縣の自給肥料改良増産指定村となり、八年には自給肥料増産五ヶ年計畫を樹て之が指導には農會技術員森下氏が當つて居る。尙その手足として五人の奨励員を置き指導の普及徹底に努めて居る。

計畫の内容を見るに、計畫前の昭和七年の實狀は堆厩肥四十萬二千貫であつたものを昭和十二年迄に七十五萬貫に増加すること、山野草は十九萬四千貫のものを三十萬貫に、鶏糞は四萬貫を八萬貫に綠肥にありてはゲンゲ七十一町歩の栽培反別を百十町歩に、ルーピンは當時皆無であつたものを三町歩に、蠶豆は五町一反歩を十五町歩に、青刈大豆一町五反を二十五町歩に、ヘヤリーベツチの皆無を三町歩に各々増加せんとするものである。而してこの計畫樹立三ヶ年後の昭和十年の實績を見るに、堆厩肥は既に六十五萬七千貫に、山野草は二十七萬六千貫に、鶏糞にありては既に豫定數量を遙かに突破し十三萬三千貫に、ゲンゲは之又豫定反別を突破し百四十町八反に、ルーピンは二町二反、蠶豆は十五町四反、青刈大豆も亦豫定反別を突破して三十町八反に、ヘヤリーベツチは二町一反に夫々増加を示し、既に三ヶ年にして正に所期の目標に到達せんとして居る。これを見ても

偉大なるは農會の指導獎勵の力である。

而も斯る獎勵に理解を持つ當村の農家に於ては自給肥料を主體とする合理的施肥を行ひつゝあるその一例を擧げて見よう。

稲作反當施肥、青刈大豆百貫、堆肥三百貫、過磷酸六貫を元肥に追肥として人糞尿百貫を挿秧十日後に施用、木灰十貫を挿秧二十二日後に施用、人糞尿百貫を挿秧三十日後に施用、過磷酸四貫を挿秧四十三日後に施用して、昭和八年には反當三石五斗三升の收穫を得、九年には稍々水害を蒙つたに拘らず三石二斗八升の收穫をあげ、尙十年には前年以上の水害を蒙つたにも拘らず二石七斗八升の收穫をあげたのである。斯くして本村農家は、連年襲ひ來る自然の暴威に對し、自給肥料を主體とする合理的施肥によつて打ち勝たんとして居る。

高知の一角に今や日下村は着々と更生の途を辿りつゝある。

(七) 自給經濟の擴充を目標に自給肥料を獎勵し好成績を納む

山梨縣北巨摩郡津金村

肥料自給化の基礎

津金村は中央線長澤驛から二里、甲府市に四里、北巨摩郡の東北に位する總戸數二百四十六戸の純農村である。

農家一戸當の耕地面積は田五反畑四反一畝で之に山林が一町四反平均となつてゐる、更に之等農家を自小作別耕地廣狹別に見ると次の如くなる。

種目	自作	自小作	小作	計
五反・歩・未滿	一二	一八	二九	五九
五反以上一町未滿	三五	三二	三〇	五七
一町以上一町五反未滿	二九	三〇	一五	七四
計	七六	八〇	七四	二三〇

しかしながら右は昭和十一年度の現狀であつて、之を昭和八年現在に比すると、かくまでと思はれる程にこの三、四年間の變遷のはげしさは非常なものである。

即ち昭和八年には五反歩未滿農家八五戸、五反歩以上一町歩未滿一一戸、一町歩以上二町歩未滿が三四戸であつた。

どうしてこの間にこんなにも耕地を擴大し得たのであらうか？
前述の如く農家一戸當耕作耕地九反一畝、山林一町四反を有し、多くないまでも少くない。因み

に昭和八年度に於ける食糧の需給關係を農家一戸當に尙て見れば次の如くであつた。

	生産	消費	過不足
米	一二・四石	六・七石	(十)五・三石
大麥	一・九	一・六	(十)〇・三
小麥	一・〇	一・八	(一)〇・八

勿論村全體の平均で農家個々を量ることは出来ないが、この外に桑園もあり山もあり兎に角條件そのものは左程悪い村は元來なかつた。

ところが農業恐慌以來農家の經濟狀態は次第に悪化して遂に赤字を見る者が簇出して來た。

この對策を如何にするか、これは當然村の考へねばならぬ重大事となつた、何故なら税金滞納増加が目に見えて顯著になつて來たからである。

折しも昭和八年經濟更生町村に指定され、こゝに本問題の根本が究明されることになつた。そしてその結果生れたのが農家經濟自給化の擴充である。そしてその結果賢くも考へられたのが農家經濟自給化をはかるに必要な土地を持たせることであつた、かくて十二町歩の開墾がなされ所謂過小農に與へられ、こゝに全村が農家經濟自給化の擴充に向ふべく土臺がきづかれ今も尙それはつゞけられてゐる。

農家經濟の自給化運動が行はれるとガムシヤラにそれをやらうとするのが從來のやり方である、ところが生憎く自給經濟の擴充は空中の樓閣と異つて一定の土地といふ基礎が必要である爲仲々思ふ様にゆかない、本村が先づこゝに着眼し得たことは成功の第一歩と云はねばならぬ。

肥料自給化の方針

かうして土地の給與に基礎を置いて第二段に村は何をしたかといふに、自給經濟擴充方針の樹立を行つた、その方針はかうである。

第一に農家經濟の自給化で最も重要な食糧と肥料と飼料であるが、その一つ／＼は密接なる關係をもつてゐるから三つを同時に自給化せしめるやう方策を樹てねばならぬと云ふこと。

第二は農家經濟の自給化と云ふと兎角消極的になる傾向があるから、之に注意して重要作物は自給肥料を以つて而も大増収をなし、家畜は自給飼料により大發達をせしめ以つて農家經濟の發達を積極的に企圖すること。

この様な方針を樹立した村はその後全力を之に傾注して之が充實に努力して來たのであつたが、かくして僅か二年後の昭和十一年度に於て帝國農會主催農家經濟自給化事例表彰に際し特別優良第一といふ榮冠を早くもかち得たのであつた。この様な方針で進められた自給計畫であるから吾々はその中から食糧をとつても肥料をとつても飼料をとつてもその一つ／＼を推賞し得るのである。

以下吾々は本村が農家經濟自給化に當つて最も努力を拂つた肥料に就て見るのであるが、常に以上の事に注意が拂はねばならない。

計畫前の肥料

大正の初期の本村に於ける農業經營狀態をかへり見るに、米作を主とし之に相當の家畜(馬)を加味する程度のものであつた。そして肥料は山野草及び落葉を原料とする厩肥或は之等の未熟品を主要肥料とし之に少量の石灰、過燐酸石灰を併用する程度で、一般に村の人達は購入肥料、金肥と云へば過燐酸石灰の事だと思つてゐたのであつた、だがこんな一口話の様な村にも大戦の景氣は舞ひ込んで來た。養蠶は田を荒し畑を荒して發展した、そしてそれにもまして金肥と云へば過石しか知らなかつた人達は、硫酸、硫酸加里を覺え更に手間のかゝらない配合肥料も喜んで使ふ様になつた。だが、歐洲大戦の好景氣が金肥を知らない村を金肥無機質肥料萬能に轉換せしめたと同様に、農業恐慌は金肥の濫費に大きなブレーキをかけた。村の二大生産物、米と繭が暴落して今や村民は金肥の重壓に呻吟せしめらるゝに至つたのである。

自給肥料獎勵は有畜農業

昭和八年度購入肥料は一萬一千圓で之を一戸當にすると五十圓になる。ところで一方小農の經濟更生は小農の唯一の資本である勞働の集約化を伴ひ、作物の増收品質の

向上に向けられる、そしてそこに多肥農業が運命的に生れる。

一方に於てかゝる方向を迫りつゝ他方に於て購入肥料をへらすことは簡單でない、そこで村の更生委員會は肥料に關する事務を左の如くきめた。

農 會 ———— 自給肥料増産
 — 施肥合理化 ———— 農 事 組 合
 産業組合、購入肥料の取扱

即ち自給肥料の増産並に施肥改善は農會が指導に當り、その指導單位を主として農事組合にいたした。

さて斯様な方針に基いて農會はどんな事業をやつて來たか、その主要なるものをあげて見よう。

昭和九年度

- (一) 縣獎勵改良厩肥堆積法並簡易堆肥製造法傳習會を三月五日より三日間開催(經費八圓)
- (二) 綠肥採種圃二反步設置(經費五圓)
- (三) 堆肥舍建設獎勵、縣の助成と相俟つて一棟五圓程度助成(經費一六〇圓)
- (四) 有畜農業獎勵(經費二七三圓)
- (イ) 幼駒育成所、縣の助成二五八圓を以つて圓周三百米の共同運動場を設置す、但し之が人夫

は消防、青年團在郷軍人の勞力奉仕による。

(ロ) 有畜講演會。

(五) 農事組合をして肥料の共同配合をなさしむ(經費三五圓)

(六) 更に時期をあやまらずに印刷物を以つて或は實地指導を以つて常に村民の刺戟に努む。

昭和十年度

(一) 有畜農業獎勵(經費二六五圓)

(イ) 有畜農業組合の設置

有畜農業組合規約拔萃

第二條「本組合は津金村區域内に居住し家畜家禽を飼養する農業者を以つて組織す」

第三條「本組合は有畜農業の普及發達を圖り組合員共同して農業經營の改善な圖るを以て目的とす

第四條 本組合は前條の目的を達成する爲左の事業を行ふ。

1、家畜家禽の基本調査を遂げ必要なる増殖計畫を樹て家畜家禽の改善増殖を行ふこと。

2、厩肥舎の設置改善堆肥の増産品質の改良及其利用を普及せしむること。

3、.....

4、.....(以下十二項まで)

(ロ) 種牡豚の購入(經費三十圓)

(ハ) 種牡馬、豚の購入斡旋

縣産業振興助成資金二、四〇〇圓産業組合資金三六〇圓の借入をなし購入者に貸付をなし種牡馬一五頭種牡豚五二頭を購入斡旋した。

(ニ) 幼駒生産に對し獎勵金を交附(計二〇四圓)

(一) 堆厩肥製造傳習會開催(經費一八圓)

前年度よりの繼續事業なるも各組合別に實施した。

(三) 糞糞蠶渣處理法改善指導

縣獎勵糞糞蠶渣處理法により之が指導をなし利用改善を圖つた、之が肥料的價值向上は従前に比し八百餘圓に及んだ。

(四) 堆肥増産品評會(經費五〇圓)

縣農會主催農事組合共進會に於ける必行事項目なるにつき堆肥改良増産の品評會を開く。

(五) 其他は前年同様

尙この外從來山林十六町步原野九二町步を採草地として利用しつゝあつたが、更に昭和九年以

後繼續事業として原野二五町歩の改良事業を開始した。
以上によつて明瞭なる如く本村の自給肥料計畫は有畜農業が根幹をなしその有畜農業を發達せしめる爲採草地の改良其他あらゆる方策が考へられてゐる。

完璧の成果

かうした二年間の努力の報酬がどんな形であらはれたか、昭和十年度の実績は五ヶ年計畫實施第一二年目であるに拘らず、すでに相當の成績を挙げ村民に指導者に至大の自信を與へ絶大の奮闘心を喚起してゐる。

(一) 養畜の發展

	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十三年 年目標
牛	三頭	四頭	五頭	一〇頭
馬	一四一	一四一	一五一	一四五
豚	七	三一	八六	一〇〇
鶏	七七三	一、二四〇	一、三九〇	二、三〇〇
細羊	四	六	八	一〇

而もこゝで注目に價することはかくも養畜の發達を見ながらその飼料費の購入額は昭和八年二千

九百圓から九年千七百圓十年度には千圓となり特に三分の一に減じてゐることである。

(二) 自給肥料増産設備の發達

	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十三年 年目標
(個人有)棟數	三	二二	三八	一一五
堆肥台坪數	一八	一一五	二二〇	九六〇
糞溜溜	八	二一	四三	九〇

(三) 自給肥料増産

	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十三年 年目標
綠肥反別	四三反	七八	一二二	二五七
數量	一四、一〇〇	二一、三〇〇	三〇、二〇〇	六一、八〇〇
山野草	八六、〇〇〇	九五、〇〇〇	一〇五、〇〇〇	一二五、八〇〇
堆厩肥	五二〇、五〇〇	六三〇、〇〇〇	七一〇、〇〇〇	八三六、五〇〇

(四) 購入肥料の減少

(五) 主要作物の増収

作物	昭和八年		昭和十三年 年度目標		昭和九年		昭和十年	
	反當	石	反當	石	反當	石	反當	石
米	總額	二、八四九	三、三八六	三、一二五	三、三〇五	二、九一	三、三〇五	二、九一
	反當	二・八〇	三・三〇	二・九八	二・九一	二・九一	二・九一	二・九一
大麥	總額	一・六〇	一、一四二	二・〇〇	二・〇〇	二・〇〇	二・〇〇	二・〇〇
	反當	四四〇	一、一四二	六二〇	六二〇	六二〇	六二〇	六二〇
小麥	總額	一・〇〇	二・三〇	二・〇六	二・〇〇	二・〇〇	二・〇〇	二・〇〇
	反當	二二〇	一、六七六	七二二	八四四	八四四	八四四	八四四
大豆	總額	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇
	反當	六〇	八〇	六四	七一	七一	七一	七一

以上の数字の語ることを要約すれば津金村は飼料自給、食糧の自給、主要作物増収といふ小農經濟安定のバランスの上に肥料の自給化を遂げつゝある。

前にも述べた通り肥料の自給化は農家經濟に於て占むる重要な自給項目の一つではあるが獨立

したものではない、肥料を自給する爲に養畜をなしたが肥料を自給し得た以上に飼料を買はねばならないのでは全く意味をなさない。

肥料の自給化を中心として飼料も食糧の自給化も進みそして農家經濟を全般的に安定せしめるその典型的な事例を吾々は津金村に見出すことが出来る。

何が村をこうさせたのか、勿論村民指導者一身同體の努力は言ふまでもないが、先づ肥料の自給は農家經濟自給化の一端である。そしてそれには一定の基礎條件が必要であると考へた指導方針の正鵠さにその基礎を見出さねばならぬ。

(八) 自給肥料を主として金肥の節約を計つた

山形縣東村山郡長崎町

山形縣東村山郡長崎町地方は所謂村山盆地に屬する米作地方であるが、反當の施肥額は十一圓四十三錢で内金肥の施用額七割四分に達する金肥施用額の多い地方である。

即ち反當の慣行施肥状況は、

購入肥料、大豆粕二十一貫、魚肥七貫、硫安三貫、之の合計金額八圓四十三錢、自給肥料として堆肥二百貫であつた。

之に對し金肥を一割二分減じ自給肥料を夫だけ増し且つ金肥は割高な肥料特に、大豆粕、魚肥等を從來より半減して割安な石灰窒素を増施し、硫酸加里、過磷酸石灰を加へ三成分の配合を合理化した。即ち

購入肥料、大豆粕十貫、魚肥三貫、石灰窒素三貫、硫酸二貫、過石三貫、硫酸加里一貫五百匁、石灰十貫、之の合計金額七圓四十錢、自給肥料は百貫増加して三百貫となした。

其の結果反當玄米收量二石四斗四升であつたものを合理化した施肥法の結果九斗三升も増加し三石三斗七升と増收を擧げた。一石當りの金肥代は從來三圓四十六錢であつたのに對し一圓二十六錢を減じ二圓二十錢となつた。

(九) 綠肥の増産と有畜農業を獎勵

岐阜縣 土岐郡 土岐町

一、自給肥料改良増産獎勵施設

本町農會が自給肥料改良増産獎勵の施設として行つて居る主なる事項は次の通りである。

- (1) 稻作施肥改善指導地——農業基礎團體へ經營費として三十圓交付する。
- (2) 小麥作施肥改善指導地

- (3) 堆肥積込週間の實施——趣旨の徹底を圖る爲、ポスター印刷物等配付並に講習、講話會の開催。

- (4) 有畜農業の獎勵——自給肥料増産を圖る目的で家畜家禽の斡旋並購入に對し補助をなす。

- (5) 厩肥舍建設補助——一棟の建設費約五十圓と見積り其の一割を補助する。

- (6) 堆肥共進會出品獎勵——郡農會主催の堆肥共進會に出品を獎勵する。

- (7) 優良種苗配付費——主として綠肥種子の優良種子購入をなし配付し又農業基礎團體の購入費に對し約二割の補助をなす。

- (8) 糞渣溜設置獎勵——糞渣の處理を完全にする爲糞渣處理場の設置を獎勵し其の設計、並に建築に就て指導する。

- (9) 柴草刈獎勵——堆肥の材料である野草刈取、堆厩肥積込を獎勵する。

- (10) 家畜増殖獎勵——有畜農業の獎勵を爲し堆厩肥の増産を計る。

二、自給肥料獎勵に依り特に成績を擧げたる事項

(1) 金肥の施用高を減少し自給肥料の増産をなした。即昭和六年頃は金肥の反當施用高は四圓〇五錢で堆厩肥施用高は三十一貫に過ぎなかつた、昭和十年度に於ては金肥は三圓二十八錢に減少し之に反し堆厩肥の施用高を倍に増加して六十貫に、綠肥作物を獎勵の結果反當十六貫を施用す

る様になつた。

(2) 農作物の収量が増加した。堆厩肥増産の結果地力は維持増進され水稲の村反當平均収量昭和六年二石六斗二升であつたが昭和十年に至り一斗七升を増加して二石七斗九升となり、小麦に於ても昭和六年一石一斗五升を一斗二升増して一石二斗七升となつた。

(3) 餘剩勞力を有利に利用、農閑期を利用して自給肥料の増産に努めて巧に餘剩勞力をなくし又農家に勤勞精神を鼓吹した事も實に大である。

三、今後の獎勵計畫

昭和十一年より五ヶ年計畫を以て次の面積に對し綠肥の改良増産を圖ることゝなつた。

(1) 水田裏作綠肥、水田總面積百六十五町四反步中現在裏作地百四十五町三反で残り二十町一反に對し將來裏作可能面積は二割五分即ち五町步を増殖する計畫。

(2) 桑園間作綠肥、桑園反別百〇九町五反中現在綠肥間作をなすもの一一町で残りの九十八町五反步に對して其の三割(二十九町五反)は將來綠肥間作可能で、其の七割(二十九町五反に對する)を以て青刈大豆を栽培せしめ残りの三割(八町九反)に對しザートウキチン又はヘアリーベッチを増殖する計畫。

(3) 麥間作綠肥、現在麥作付面積は百四十四町三反で中、間作をなすもの一町一反で残り百四十三町

二反の五割即ち七十一町六反に對し青刈大豆を増殖する計畫。

(一〇) 果樹園間作綠肥の獎勵

青森縣西津輕郡水元村

一、自給肥料改良増産獎勵施設の概要

水元村農會が自給肥料改良増産獎勵の施設として行つて居る主なる事項は、

(1) 青刈大豆採種圃經營——本村間山農事實行組合へ縣より配付せられた原種一反步を村農會の指導に依り栽培し、之より生産せる種子は第二次採種圃即ち部落採種圃五反步へ無償配付する

(2) 堆肥盤固め——村農會より坪當り一圓五十錢の補助金を交付して獎勵。

(3) 堆肥品評會——昭和八年九年は個人出品を行はしめたが十年度よりは農事改良組合單位に出品せしめる。

二、自給肥料増産設備狀況

堆肥舎、五三棟、五三〇坪、採種圃五反、四石採、堆肥盤三八二ヶ。

三、獎勵事業實施により收めたる效果

(1) 金肥の反當施用量を三圓五十二錢より二圓二十五錢に減少せしめ、堆厩肥の施用高を二百

二十貫より、五十貫増加して二百七十貫となした。

(2) 農作物の収量を増加した、水稻反當収量を二石四斗より二石八斗に苹果の反當収量三百五十貫を五十貫増加して四百貫とした。

四、今後の計畫

苹果の作付反別二百三十八町七反歩餘あり現在の青刈大豆栽培面積二十三町三反なるも將來栽培し得る見込反別は五十七町九反で五ヶ年計畫を以て全園に栽培普及せしむることとし、又現在農家中堆肥盤固めの未設置農家二〇一戸に對しては、四ヶ年計畫を以て全農家に普及せしむる方針である。

〔附〕 自給肥料獎勵の唄

◎都

々

逸(數唄)

(千葉縣選)

- 一、一に堆肥二に金肥と、除隊歸りの腕がなる。
- 二、庭の隅なる繁れる木の葉、落ちりや堆肥の素となる。
- 三、さらばこれより積まうぢやないか、牛馬仕立て、藁運び。
- 四、強いて獎めて積んだる肥も、今ぢや堆肥の仲となる。

- 五、五分の作なら堆肥が勝ちよ、金肥速效で土疲せる。
- 六、論より證據いも作御覽、金肥作りぢや實が取れぬ。
- 七、新規積込み野外もよいが、切替作業は小舎の中。
- 八、野外堆肥も是非ないけれど、成らば積みたい堆肥小舎。
- 九、苦勞かけたる女房や倅、笑顔で眺むるこえの山。
- 十、とうと積んだる堆肥の山は、黄金掴んだ心持する。

◎草

津

節

(千葉縣選)

▲貧乏するのも無理ではないよ(ドッコイシヨ)

堆肥積まずに(コーリヤ)金肥を買ふよ(チヨナチヨイナ)

▲更生農村一度御覽(ドッコイシヨ)

何處の家でも(コーリヤ)堆肥積むヨ(チヨナチヨイナ)

▲兎、鶏、豚まで飼つて(ドッコイシヨ)

金に換へたり(コーリヤ)肥を取るヨ(チヨナチヨイナ)

▲れんげ裏作間作大豆(ドッコイシヨ)

自給肥料で(コーリヤ)氣の輕さヨ(チヨナチヨイナ)

▲金肥減らして手間肥増やしや(ドッコイシヨ)

土地も肥えれば(コリーヤ)腹もヨ(チヨナチヨイナ)

◎宣 傳 歌 (大分縣選)

自力更生堆肥増産行進曲(東京行進曲ノ譜)

- 一、昔戀しい景氣な時代、永く續くと誰が知る、朝に踊つて夕に飲んで、今ちや百姓も涙聲。
- 二、堆肥作つて金肥やめて、悟開いた人もある、棄てた藁屑拾ふた馬糞、せめて多助の思出に。
- 三、狭い村でもやりようちや廣い、行くな遊びに灯の街に、あなた奮發わたしは努力、稼げ働きたまゝになる。
- 四、夜なべしませうか朝起きましよか、心あはせて努めませう、變る景氣に豊けき村は、誰も笑顏に榮え來る

◎堆 肥 獎 勵 小 歌 (串本節ノ譜)

- ▲天地恵みの堆肥の材料、苦勞いとわす刈り集めアラヨイシヨ~~~~~。
- ▲積みよ作れよ皆さん共に、作る堆肥は富の基アラヨイシヨ~~~~~。
- ▲不況くで精出す農家も、改良堆肥で光り出すアラヨイシヨ~~~~~。
- ▲一家揃つて心を合せ積んだ、堆肥は品が良いアテヨイシヨ~~~~~。

▼自給自足に自覺が出來りや、皇國の不況もどこへやらアラヨイシヨ~~~~~。

◎都 々 逸 (富山縣選)

- ▲朝日出るまで刈る露草で、馬も肥ゆれば田も肥ゆる。
- ▲紅いてがらで秣を刈れば、主は笑顔で堆肥積む。
- ▲作らしやんせ家毎に堆肥、土地も肥ゆれば家も富む。

◎標 語

【富山縣】

- ▲瘦せた農村堆肥で肥せ
- ▲堆肥の村に輝やく更生
- ▲榮える農家は堆肥から

【岐阜縣】

- ▲惜むな努力積込め堆肥
- ▲汗で作つた堆肥と緑肥、粗末にすれば實がならぬ。

【鳥取縣】

- ▲焼くな捨てるな積み堆肥

- ▲ 勵め刈草増せ厩肥
- ▲ 肥せ牛馬増せ厩肥
- ▲ 金の肥より汗の肥
- ▲ 良い桑に作ある資本はいらぬ、鎌と箒のねさせ肥。

▲ 桑の生長は、刈草の増え、厩肥の増え、金の肥より汗の肥、良い桑に作ある資本はいらぬ、鎌と箒のねさせ肥。

▲ 桑の生長は、刈草の増え、厩肥の増え、金の肥より汗の肥、良い桑に作ある資本はいらぬ、鎌と箒のねさせ肥。

▲ 桑の生長は、刈草の増え、厩肥の増え、金の肥より汗の肥、良い桑に作ある資本はいらぬ、鎌と箒のねさせ肥。

▲ 桑の生長は、刈草の増え、厩肥の増え、金の肥より汗の肥、良い桑に作ある資本はいらぬ、鎌と箒のねさせ肥。

▲ 桑の生長は、刈草の増え、厩肥の増え、金の肥より汗の肥、良い桑に作ある資本はいらぬ、鎌と箒のねさせ肥。

昭和十二年七月十二日印刷
昭和十二年七月十七日發行

編輯兼發行者 帝國農會
右代表者 渡邊忠吾
印刷者 東京市芝區新橋三丁目二十番地 西脇勝太
印刷所 東京市芝區新橋三丁目二十番地 更生社
發行所 東京市麴町區丸ノ内三丁目一番地 帝國農會
振替口座東京四〇五二番

375
558

總發行所
東京市神田區大塚三丁目一番地

會 社 會

東京市板橋區板橋三丁目三十二番地
東京市丸の内區有樂町三丁目二番地

東京市丸の内區有樂町三丁目二番地	東京市板橋區板橋三丁目三十二番地	東京市神田區大塚三丁目一番地
會社	會社	會社
東京市丸の内區有樂町三丁目二番地	東京市板橋區板橋三丁目三十二番地	東京市神田區大塚三丁目一番地
會社	會社	會社

東京市丸の内區有樂町三丁目二番地
東京市板橋區板橋三丁目三十二番地
東京市神田區大塚三丁目一番地

東京市丸の内區有樂町三丁目二番地
東京市板橋區板橋三丁目三十二番地
東京市神田區大塚三丁目一番地

終